

## 独立から20年〜もうひとつの世界は可能だったのか

東ティモールは2022年5月20日に主権回復20周年を祝いました。20年前のこの日、国際社会が見守る中、暫定統治をしていた国連の旗がゆっくりと下ろされ、24年間インドネシア軍事侵攻に抵抗し続けたゲリラ兵たちによって東ティモール国旗が粛々と掲げられました。

20年前のあの瞬間は、東ティモールの人びとにとっては失った家族や友人の命にこれからの国づくりを誓った瞬間でした。東ティモールの抵抗闘争を支えてきた国際連帯組織にとつて東ティモールの独立は、虐げられてきた南の小さな国が、インドネシアとその背後にあった大国の思惑を退け、勝利した証であり「もうひとつの世界」\*が東ティモールならば実現できるのではないかと希望だったように思います。

しかし、独立後の20年は、抵抗闘争のリーダーたちが国づくりへの展望を異にし、政権争いに明け暮れました。増え続ける若年層に理想とする教育を施すことも出来ず、十分な就労の場を設けることもできず、限られた油田からの収益だけに国全体が依存してきました。このままではいけないという危機感はず

にありながら、東ティモール政府も、伴走しつづけた国際援助機関も、

これといった方策を講じることはできませんでした。

今年4月におこなわれた大統領選では、東ティモールの抵抗闘争を外交部門で支え、96年にノーベル平和賞を受賞したラモス・ホルタ氏が当選しました。独立後、外相、大統領、首相と要職を歴任し、72歳でふたたび大統領の座につきまます。独立時の夢が叶っていないことの現れでしょうか。他方で、世界は富める北と貧しい南という構図からグローバルな格差社会へと変わってゆき「もうひとつの世界」を希求する現場は日本のわたしたちの身近なところにも見出せるようになっていきます。

パルシクはこの20年間、コーヒー生産者をはじめ農村に暮らす人びとが「独立してよかった」と思える暮らしを実現することに寄り添ってきました。その中で、東ティモールの人びと

から学ぶことは多く、経済的にはまだまだ貧しい暮らしの中で、身を寄せ合って思いやり、助け合い、分かち合って暮らす東ティモールの人びとの姿に「もうひとつの世界」への希望を見出し続けた20年でした。  
(伊藤淳子)



右：独立20周年に向けて、首都デビリの街中で国旗を売る母子 下：2001年8月におこなわれた憲法制定議会選挙キャンペーンの様子(2001年撮影)



\*各国政府や企業家が集まる「世界経済フォーラム」(通称ダボス会議)に対抗して、2001年より毎年開催されている地球規模の市民フォーラム「世界社会フォーラム」の合言葉。グローバルゼーションが世界にもたらす影響と問題を民衆の立場から考える国際運動。



コーヒー産地マウベシで子どもたちとつづぐ母親(2006年撮影)

目次	東ティモール 独立から20年〜もうひとつの世界は可能だったのか…… 1	みんかふえ コミュニティカフェ再開に向けて/海外ルーツの市民に寄り添うために…… 5
	東ティモール 小学校での栄養改善活動/ミャンマー 希望を持ち続けてもらうために…… 2	フェアトレード 東ティモール 豪雨災害から1年、ご寄付のお礼とご報告/ちよっと寄り道♪フェアトレードな人びと…… 6
	スリランカ 独立以来の経済危機を引き金に広がる混乱/パレスチナ 女性組合のチーズ工場完成!…… 3	「サリーのラッキーバッグ」を販売します/フェアトレード商品のアレンジレシピ ちよっぴり大人なコーヒーゼリードリンク/Twitterをはじめました♪…… 7
	レバノン ウクライナ紛争の影響を受けるレバノン/シリア 女性たちの食品加工事業…… 4	パルシクからのお知らせ 退任のご挨拶…… 8

東ティモール 小学校での栄養改善活動

2021年4月にはじめたエルメラ県の小学校での栄養改善活動が終盤に差し掛かっています。学校菜園ワークシヨップでは、教育省の学校菜園担当者、教員、児童たちとともに学校の畑の整備を行っています。もともと各学校にある畑のスペースは、感染症対策のための休校の影響もあり、手入れされていない草原のような状態でした。それがワークシヨップ後には、見事、野菜や花を植えられる立派な畑へと姿を変えました。堆肥には牛の糞や雑草を使用しており、施肥から2〜3週間経って土とよく馴染んだら種を

人びとの声

ヌヌタリ小学校、5年生担任セオリタさん



学校菜園ワークシヨップが  
終わって1か月半後の様子。  
真ん中で作業しているのが  
セオリタさん

学校菜園ワークシヨップが開催され、学校の畑が整備できてとても良かったです。ワークシヨップの後に野菜を何種類か植えてみたところ、からし菜はとくに立派に育っています。畑の柵もパルシックから配付された網などを使って作り直すことができました。ワークシヨップに参加した生徒のうち数名から、自宅の畑も畝を作って整備したと教えてくれました。畑で採れた野菜は給食で使うよう計画しています。

まきます。学校菜園は、ヤギや牛などの動物の侵入や、休校中の管理など、維持していく上で課題が多々ありますが、ワークシヨップを実施した学校から、野菜が順調に育っているという嬉しい報告があり、ひとまず安心しました。

学校菜園と同時に5年生の児童を対象に栄養教育も実施しています。食品の栄養素ごとのグループ分け（3色食品群）や、栄養バランスについてゲームをしながら学んでいます。



完成した畑。丸やCの字の形の畝  
ができあがった

その他にも学校での活動として、調理担当者への料理教室や子どもたちに日々の食事の記録をつけてもらう栄養日記を行ってきました。これらの活動を通して、子どもだけでなく、保護者や教員など大人の世代まで幅広くアプローチできました。（桑原真菜実）

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

ミャンマー 希望を持ち続けてもらうために

2021年2月のミャンマー国軍のクーデターから1年が経ちました。国際社会が具体的な行動を起こせないなか、市民不服従運動（Civil Disobedience Movement: CDM）に参加した市民らの死者は1800人を超え、逮捕や拘束者数は1万2000人にものぼります。国軍による虐殺を目の当たりにし、国際社会の介入も期待できず、苦渋の決断で、武器を取り戦闘に身を投じる決断をした若者たちもいます。国軍による国民防衛隊（Peoples Defense Forces）や少数民族武装勢力に対する攻撃は各地で続いており、国内の治安情勢と人道状況は悪化の一途を辿っています。

半年前には60万人だった国内避難民の数は、今や93万人を超えています。国外に逃れた人も6万人近くいます。国際社会の関心が薄れる中、わずかでも日本の市民から支援の手を差し伸べ、支え続けることが、ミャンマーの人たちの励みになると考えています。



国内避難民となった女性が  
一時的に滞在していたテント。  
安全ではなく、雨風にも  
十分に耐えられない

パルシックは、2022年1月より、

人びとの声

寄付を受け取ったEさん（元中学校教員）

軍事支配体制が続く限り、私たちは民主主義や自由を手にすることは出来ません。私たちには、未来の世代への責任があるのです。だから私は絶対に諦めません。仕事を失ったため、2人の子どもの養育のほとんどが大変ですが、私は、市民不服従運動に参加し続けたいです。世界中から支援してくれる皆さんに、本当に感謝しています。皆さんの励ましと助けがなければ、私たちは、運動を続けることが出来ません。この危機が終わるまで、どうか支え続けてください。

Eさんが現在暮らす場所



CDMに参加したために職や収入を失った世帯へ日本の皆さまからのご寄付を届け、生活支援を実施しています。これまでに、身の安全のため、地方に逃れざるをえなかったCDMに参加した人びとに対して、1世帯当たり約6500円の現金給付あるいは物資支援を合計で1051人に行いました。CDMに参加して職を失った元公務員のAさんは「いただいたお金のおかげで、生後1か月の赤ちゃんと妻のために、清潔な衣服と栄養のある食材を買うことができました」と話しました。

（この事業は、皆さまからのご寄付により実施しています。）

■スリランカ 独立以来の経済危機を引き金に広がる混乱

内戦終結後、農業や工業の成長を後回しにし、観光産業に依存してきたスリランカは、現在1948年の独立以来最大の経済危機に直面しています。外貨不足により2021年から米や、粉ミルク、砂糖、セメントなどの価格が高騰、さらに、2022年に入ってから燃料が輸入できず計画停電が人びとの生活に影響を与えています。また、輸入に頼っている医薬品の不足も同様に深刻です。2019年4月のイースター連続爆破事件、その後続く新型コロナウイルスの世界の大流行、化学肥料・農薬の輸入禁止、

人びとの声

アエーシヤさん

(有機茶栽培支援のフィールドアシスタント)



2018年から南部テニヤヤでの有機茶栽培支援のフィールドアシスタントとして、小規模紅茶農家グループ・エクサのメンバーの現場視察、指導を行う。

アエーシヤは2人の子どものお母さんです。経済状況の悪化で毎日の食料の確保はもろろんのこと、子どもの将来への心配を募らせています。先生やバス会社が頻繁に行うストライキのため、2人の子どもが通う学校は度々休みになっています。文房具も国内で品薄のため価格が高騰し、今年のお正月の贈り物として下の子には新しいノートを買い与えることができましたが、上の子には我慢してもらっています。先行きが見えない中、上の子は進学に重要な試験を控えています。子どもたちの将来が心配です。



上左：平和的抗議活動のスローガン、SNSでのハッシュタグになっている「GotaGo Gama (ゴタバヤ大統領は家に帰れ)」のプラカード  
上右：「GotaGoHome」が投影された大統領府事務局正面  
下：マヒンダ元首相とバジル元財務大臣の顔写真をゴミ箱に貼っている

出典：https://www.facebook.com/ThilinaKWP

そしてロシアのウクライナ侵攻による、原油や小麦価格の高騰、紅茶の輸出量減などの影響で経済悪化は深刻化していきま

ました。この状況のなか、適切な手を打てない政府に対して、今年3月から市民による抗議運動が始まりました。コロンボの中産階級の若者を中心に、ゴタバヤ・ラジャパクサ大統領、マヒンダ・ラジャ

クサ首相の退任、また政治家による数々の汚職に対する検証と責任追及を求めて平和的な抗議が続いています。5月12日、過去4回の首相経験のあるラニル・ウィクラマシンハ氏が新首相に就任しましたが、今後も困難な状況が続くことが予想されます。(高橋知里)

■パレスチナ 女性組合のチーズ工場完成!

2018年にガザ南部で開始した「酪農を通じた女性グループの生計支援事業」が、2022年2月に終了しました。事業で支援してきた女性たちは、共同で羊小屋を運営し、子羊や生乳、乳製品を販売することで、収入を得られるようになりました。

2020年には乳製品作りに意欲のある女性を中心に女性協同組合を結成、現在も44名が活動しています。組合メンバーは、これまで、チーズ作り研修に参加したり、会計やマーケティングに関する研修を受けたりと、組合運営に必要な知識を学んできました。女性組合のための新しいチーズ工場も、2021年12月末に完成。2022年1月からチーズ生産をスタートさせ、地元レストランやガザ市内のスーパードから注文を受けています。

人びとの声

エクラムさん(女性協同組合代表)

2021年9月末から10月初めの7日間、組合の女性10名で、チーズ作り研修を受講しました。最初の2日間は乳製品加工に関する理論の勉強、残りの5日間は10種類のチーズ加工を学ぶ実践的な授業でした。授業の後は毎回、家に帰って研修で学んだチーズ作りを練習して、うまくいかない部分があれば次の授業でトレーナーに相談しました。



左がエクラムさん。展示会に女性組合のチーズを出展しました。

私たちは「プラクティス・メイクス・パーフェクト(練習は熟達の道)」ということを学びました!

2月22日には、チーズ工場のあるアルシヨカ村の市長などを招いて、チーズの試食会を兼ねた工場の落成式を行いました。式典後「ガザで初めて女性の...

で運営している工場」と現地メディアに取り上げられるなど、これまで注目されることのない女性たちの取り組みが日の目を見ました。この事業は終了しましたが、2022年度は、ガザ南部の別の2村で畜産支援を開始します。引き続き、ガザの女性たちの自立を支援していきます。(橋村)

チーズ作りをする女性組合のメンバーたち

(この事業は、日本NGO無償連携資金協力および連合・愛のキャンパ中央助成からの助成と皆さまからのご寄付によって実施しました。)

## ■ウクライナ紛争の影響を受けるレバノン

レバノンの状況は好転する気配がありません。レバノンで暮らすシリア難民150万人のうち9割が生きるのに最低限必要な支出（1日当たり2100キロカロリーを満たす食料、料理用燃料等を購入するのに必要な金額）以下で暮らしており、レバノン人ですら半数の220万人が何らかの支援を必要とするようになりました。

この状況に拍車をかけているのが、ロシアによるウクライナ侵攻です。レバノンは主食のパンの原料である小麦の8割をウクライナやロシアから輸入していましたが、戦争でこれらの国からの輸入ができなくなりました。同時に燃料不足や価格高騰、経済危機による通貨価値の暴

落と重なった結果、電気のみならず、パンすらも不足する事態となつてきています。今後は小麦への政府補助金の大幅削減の可能性もあり、最も経済的脆弱性の高い人びとが、安価で空腹を満たせるパンすら買えない状況になることが危惧されています。教育も危機的な状況で、3歳から18歳の子どものうち、シリア難民では6割以上、レバノン人でも2割以上が、交通費や教材費を払うことができない等の理由で学校に通うことができていません。パルシックは、こうした子どもたちが学校に通うための支援をしています。

（風間）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

## ■シリア 女性たちの食品加工事業

シリアでは紛争が落ち着きを見せ、新型コロナウイルスの感染拡大も収まりつつありますが、経済悪化により失業率が上がるなかで、ウクライナ紛争の影響によりガソリンや砂糖などの価格が高騰し、人びとの生活に大きな影響を及ぼしています。パルシックは現在、ホムス県とダマスカス郊外県で就業の機会が乏しい女性世帯を対象に、食品加工の活動を行っています。地域の農家から野菜や牛乳を購入して女性世帯に配付し、それぞれの家庭で漬物やチーズ、ヨーグルトにして自分たちの食料とするほか、余った分は

販売して家庭の収入にも繋げられるよう支援しています。

ラマダンの時期は、パルシックが支援している世帯では、加工した食品を他の家族や近所の知人におすそ分けしている姿が見られました。紛争以前からそれぞれの地域において助け合いの文化があり、パルシックとして支援できる世帯が限られる状況下でも、人びとは余った食料を販売ではなく分かち合っています。地域の大事な文化を繋いでいる人びとから、パルシックも日々学んでいます。

（大野木）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

### 人びとの声

#### アンソニー（パルシックススタッフ）

アンソニーは、レバノンにおいて多くの権利が制限されたパレスチナ難民の3世代目です。苦境の中でもレバノンで最も優秀な大学を卒業し、パルシックのレバノン事務所で働いています。

「現在この厳しい経済社会状況下で仕事があり、家族を養うことができるのは、信じられないほど幸運なことです。けれども、小さなストレスは日々積み重なり、かつては標準的な生活をしてきた友人から生活が苦しいというのを聞いたり、多くの友人がレバノンから出て行ってしまったりしており、絶望的な気分になることがあります。」



適切にごみ捨て・収集されずに通りに散乱したごみ。日々感じるストレスのひとつ

#### 食品加工活動に参加している女性たちからの声

チーズやヨーグルトに使う牛乳は、地域の農家から搾りたてのものが毎週朝早くに配達されます。子どもたちは配達を楽しみに前の晩は早く寝て、朝早く起きています。紛争の影響で牛乳の値段も上がり、スーパーでは通常より薄めた牛乳が安価で販売されているため、子どもがいる世帯では、牛乳の味、栄養の面で心配との声を聞きました。搾りたての牛乳は以前の生活のときのようにとてもおいしく、子どもたちも作ったヨーグルトを喜んでいきます。



牛乳を温めて発酵させ、ヨーグルトを作っている

ダマスカス郊外県での研修の様子



グループで色紙を使って分数を学ぶシリア難民の生徒たち

■コミュニティカフェ再開に向けて

2018年6月に東京都葛飾区白鳥地区にコミュニティカフェ「みんなかふえ」をオープンして5年目を迎えました。経済的な貧困に加え、人と人の関係性の希薄さが指摘される日本で、困ったことがあれば地域で支えあえる居場所づくりをめざしてきましたが、2020年から長引く新型コロナウイルスの影響により、子ども食堂やカフェ営業は一年以上中止、現在は週に1回のフードパントリー（食料配付）のみを実施しています。

「カフェはいつ再開するの?」「こういうイベントをやったらどうか?」「ボランティアや地域の方から問い合わせたい!」という思いと、いつまで続くかわからない状況にどう判断したら良いのか悩



ボランティアさんからいただいたコリアンダーとヘビイチゴの手作り花瓶。カフェではパルシクのフェアトレードコーヒーと紅茶などをお楽しみいただけます!

む日々……。人との接触を制限し、思うような活動が出来ないもどかしさをずっと抱えていましたが、今年に入り再開に向けて議論を重ね、6月からカフェ営業を再開することに決めました。フードパントリーの利用者やボランティアの声を聞くと、こういう時代だからこそ「みんなかふえ」のように誰でも気軽に立ち寄れる、人と人が繋がる居場所が必要だと強く感じます。

再開に向けてどんなカフェにしたいか、また通常のカフェだけではなくイベント開催についても、ボランティアや地域の皆さんと相談しながら、みんなのカフェとしての「みんなかふえ」作りを始めています。

(小栗清香)

(この事業は、皆さまからのご寄付で実施しています。)



フードパントリーでは「コメ・野菜でつながる百姓と市民の会」からのご寄付でいただいた米と有機野菜や、企業や近隣の方からいただく寄付を中心に配付しています

■海外ルーツの市民に寄り添うために

最新の統計では、282万人もの海外ルーツの人びとが日本に暮らし、さまざまな仕事を担っています。しかし、移民や難民を公式には認めない日本政府の政策の結果、その多くの人たちが日本社会で暮らしていくうえで、多くの困難に直面している現実もあります。「コロナ禍で生活に困窮しているが、誰に相談していいかわからない外国人が多い」。そんな声を聴くことも増えており、パルシクは2022年1月から在留外国人の支援事業である『海外ルーツとの市民との共生事業』を開始しました。



上: ボランティアと活動について会議を行っている様子

右: 葛飾区内にも多くの外国料理屋があります



15人のボランティアの方と一緒に、海外ルーツの人びとの「お困りごと」を聞く相談カフェを月2回開催し、相談カフェのチラシを手に葛飾区のパングラデシユやネパールの人たちが経営するレストランを訪ねる活動も行っています。「高校の進学のため日本語を勉強する場所を知りたい」、「コロナによる休業補償の手続きについて教えて欲しい」といった相談を受けたケースもあります。また、ボランティアの方たちと、在留外国人のビザの仕組みなどを学ぶ勉強会も行っています。しかし、まだまだ相談カフェを行っていることが知られておらず、相談に乗った件数の数は少ないのが現状です。新しい事業であり、どのような内容がパルシクとして本当に海外ルーツの人びとのためになるか模索は続いています。多くの海外ルーツの人びとと出会い、彼らの力になれるように事業を発展させていきます。(藤本迅)

(この事業は、赤い羽根共同募金の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)



## 豪雨災害から1年、ご寄付のお礼とご報告

2021年4月4日に東ティモール全土を襲った豪雨災害から1年以上が経ちました。緊急支援の呼びかけに多くの方が応えて下さいました。店頭で寄付ボックスを置いてくださったり、コーヒーの売上の一部を寄付に回して下さったりしたほか、個人のコーヒーのお客さまからも励ましのメッセージやご寄付などもたくさん集まりました。コーヒーで始まった繋がり広さ、温かさに心を打たれました。

被災状況の全容が把握できないまま、災害直後は長い付き合いのある現地 NGO と協働してディリ市内の避難所へ身を寄せる人びとへ食料や生活・衛生用品を届けました。新型コロナウイルスの市中感染が始まり県をまたいだ移動が制限される中、思いつくつてを駆使して地方の情報を収集し、コーヒー産地であるアイナロ県マウベシ郡、その東側に位置するマナトゥット県ラクルバール郡での家屋や農地の被災状況を把握できたのは、災害から1か月が過ぎた5月に入ってからでした。

マウベシで土砂に家ごと呑み込まれ犠牲となった5人家族のために建てられた十字架、ラクルバールで土石流によって流された農地、川の氾濫で伝統的灌漑設備が崩壊し1年以上水が入っていない水田、災害の爪痕が残る風景にもそこに暮らす人びとの息遣いを感じます。

2021年、災害をもたらした自然は、コーヒーの大豊作という置き土産を置いていきました。昨今、世界的にコーヒーの市場価格が上昇しており、マウベシでも買付競争が予想されています。2022年度は、大豊作とはいかないものの、裏作としては安定した収量予測が出されています。2019年から取り組んできた「コーヒー畑の改善事業」の成果が少しずつ見え始めています。



犠牲となった家族のために建てられた十字架 (マウベシ郡ハウティロ村)



土石流の跡を案内してくれた集落長 (ラクルバール郡バタラ村)



東京都葛飾区にある叶夢さんは金町駅から徒歩22分。バスで行けばすぐですが、天気の良い日にはお散歩にちょうどいい距離です。丁寧にハンドピッキングされた生豆を焙煎・販売しています。

店主の堀合さんご自身に障がいを持ったご家族がいらっしゃる事がきっかけで5年前にオープンした叶夢さんは、障がい者が一緒に働けるあたたかい空間で、ココマウをふくめ10種類の豆を取り扱っています。毎回しっかりと行われるハンドピッキングもさることながら、焙煎方法にもこだわりがあるそうで。

「通常の焙煎の2倍の時間かけるんですよ。時間はかかるし、少量しかできないけれど、コクと甘味が一段と出る」

そうお話ししてくれた堀合さんにココマウの評価を聞くと「ハンドピックの必要がないと感じるほどきれいな豆」とのことでした (ほっ!)



パルシックとの出会いは、みんなふえがやっていた子ども食堂を通じてでした。焙煎して出た超過分のコーヒーをみんなふえに寄付して下さっていた叶夢さん。ちょうどオーガニック・フェアトレードの商品を探していたところ、パルシックも生豆を取り扱っていることを知り、お取引がスタートしました。

今では、お店でももちろんのこと、オンラインショップや地域のマルシェ、地域のパン屋さんやコラボなど、地域に根差したさまざまな活動もされています。お店の前には当たりくじつきのコーヒー自販機 (!) もあるので、ぜひお近くに寄った際は運試しもあわせていかがでしょう。

お店の前にある当たりくじつきコーヒー自販機



叶夢店主の堀合さん

… 就労継続支援 B 型事業所 …  
叶夢 (かなん)

〒125-0035  
東京都葛飾区南水元2丁目23番20号  
RS南水元1階  
TEL : 070-3331-6667

営業時間 : 10:30 ~ 16:00  
定休日 : 土日祝

オンラインショップ  
<https://www.pippoec.com/kanan/>

パルシクの  
フェアトレード商品

対等な交易を通じて、人と人のつながりと信頼を広げていくことこそが紛争の抑制、平和の形成に寄与すると考え、「商品の生産、流通、消費などが、市場の価格だけに依存するのではなく、人間的な交流と信用に基づく」という取引のかたちを目指して、直接的な交流、交易を重視しています。

スリランカを  
応援!!

寄付つき

サリーのラッキーバッグ  
を販売します

スリランカの経済危機は、サリーコネクションの商品を製作している北部の女性たちの生活にも直結して影響を与えています。パルシクもフェアトレードを通して、何が出来るかを考え、寄付つき商品「サリーのラッキーバッグ」を販売することにしました。

スリランカは2019年4月に起きた連続爆破事件に次いで、新型コロナウイルスの影響を受け、観光客が激減しました。パルシクが協働し、現地でサリー製品の販売を担ってきた社会的企業 KAIS の事務所には、観光客向けに商品化したサリー製品の在庫が眠っていました。それらを日本に送ってもらい、バラエティに富んだサリー雑貨を詰め合わせ、寄付つきの商品として、数量・期間限定で販売します。日本ではこれまで販売されていない商品もたくさん入っています。



ご寄付は、サリーコネクション事業の継続にかかる現地での材料調達、女性グループへの生活物資配布にかかる費用などとして使用させていただきます。

製品の作り手の女性たち



サリーの  
ラッキーバッグ

パッチワークのバッグなど2種のバッグ、ポーチ、きんちゃく、シュシュ、ネックレス(一例)

- 1袋約6アイテム入り(アウトレット品を含む1,500円分)
- 寄付つき販売価格(税込み)：2,150円 / 3,150円 / 5,150円
- 販売期間：2022年7月末まで(予定)

ご注文は、TEL/FAX用紙/パルマルシェのサイトから随時受け付けております。限定販売のため商品がなくなり次第終了となります。スリランカへ、皆さまのご関心とお力を寄せていただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

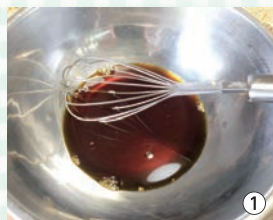
\*パルシクへのご寄付は寄付金控除の対象となります

フェアトレード商品の  
アレンジレシピ

ちょっぴり大人なコーヒーゼリードリンク

材料

- カフェ・ティモール 有機リキッドコーヒー……300ml
- 粉ゼラチン……5g
- 砂糖……大さじ2
- 牛乳……お好きなだけ
- 練乳……お好みで



作り方

- ①ボウルに60℃程度(電子レンジ500Wで1分程度)にあたためたリキッドコーヒー 100mlを入れ、砂糖と粉ゼラチンを入れて混ぜる。
- ②しっかり溶けたら残りのリキッドコーヒーを混ぜる。(写真①)
- ③粗熱が取れたら冷蔵庫で1時間ほど冷やす。
- ④牛乳と練乳(ガムシロップでも可)を混ぜたものに、スプーンで適当な大きさにくずしたコーヒーゼリーを入れて完成! (写真②)



カフェ・ティモール  
有機リキッドコーヒー  
(深煎り無糖、1L)  
702円(税込み)

カフェ・ティモールのリキッド  
コーヒーがしっかりとコクのある  
味のため、大人なコーヒーゼリー  
ドリンクになります!

暑い夏のおともにぜひ♪

Twitterを  
はじめました♪

パルシクのフェアトレード商品の入荷情報やアレンジレシピ、現地のこと、フェアトレード部の日々の徒然などをお届けします。フォロー、お待ちしております!

@parcic\_ft



## 退任のご挨拶

代表理事 井上禮子

14年間にわたるご協力ありがとうございました。2008年、コーヒー生豆を抱えて、どのように売ったら良いのかわからない中でのパルシックの旗揚げでした。すでに東ティモールのコーヒー生産者支援とスリランカの内戦復興事業を開始していました。間もなく東日本大震災、そしてパレスチナの50日間戦争、シリア難民支援へ……と事業を拡大せざるを得ない状況に遭遇しました。直近では2021年のミャンマーにおけるクーデターです。力不足ながら新たな事業に取り組むたびに多くの方々を支えられてきました。会員の方々、地域の状況を教えてくださいの専門家……2022年4月に入って「難民はウクライナばかりではない」とミャンマーの国内避難民のためにご寄付をくださった方もおられ感動しました。2018年からは東京葛飾の一角でささやかなコミュニティカフェをオープンし、2021年からは海外ルーツの市民を応援する活動を始めました。スパイスの効いた美味しい料理を始めとする多様な文化をもたらしてくれる海外ルーツの人びととの共生は、成熟が求められる、これからの日本の市民社会にとって大切です。理事を引退させていただきますが、友人として、皆さまとともにこれからも、パルシックの活動を応援していきます。



2003年、マウベシのコーヒー生産者と  
ともに

## 国際協力の歩み 理事退任にあたって

パルシックの発足以来、長く理事を務めてきた。本来NPOの理事は、経営責任を負う役職である。しかし振り返ってみて、経営上の難問題に

直面した時、代表理事である井上禮子さんの判断にゆだね、理事としてはただ付和雷同してきたにすぎない。実務的にも貢献したことは、ほとんどない。海外の事業地も、スリランカ以外は訪問していない。

私が手をこまねいていた十余年、パルシック事業は量的にも質的にも、目覚ましい発展を遂げた。私以外の理事や職員による、熱意と努力のたまものであろう。抽象的な概念にすぎなかった「国際協力の歩み」に生命を吹き込み、その具体化を進めてくださった同僚の皆さんに、心から感謝したい。ありがとうございます。



(井上禮子より補足)

「パルシックが目指す国際協力は、地球上の各地で暮らす人びとが国民国家の壁を乗り越えて、直接的に助け合う……同じ時代に生きる人間として、相互に支え合う道を開きます」というパルシックの理念の草稿は、中村尚司さんの手になるものです。設立当初はスタッフも2名くらいでしたので、他の3人の理事の方々とともに、文字通り粉骨砕身していただきました。

## 皆さまのご支援によって支えられています

### パルシックサポーター

パルシックの活動に参加したいけれど何をしたら良いかわからない、時間がとれなくてボランティアに参加できない、という方はぜひサポーターになってパルシックを支えてください。

#### ▶サポーター会費

月々 500円コース(月払いまたは1年分6,000円一括払い)  
月々 1,000円コース(月払いまたは1年分12,000円一括払い)

※サポーター会費、寄付は寄付金控除の対象となります。

### パルシック会員

パルシックの趣旨に賛同し、総会等を通じてパルシックの活動に参加していただける会員、賛助会員を募集しています。

#### ▶年会費 会員：10,000円／賛助会員：20,000円

※入会ご希望の方は、東京事務所までお問い合わせください。

### ご寄付の お願い

あなたの寄付で  
パルシックの活動を支えてください。

事業地を指定してご寄付いただくこともできます。  
みなさまの温かいご寄付をお待ちしています。

- クレジットカードでの寄付(Webサイトより)  
<https://www.parcic.org/donation/donate/>
- 郵便局からの寄付 郵便振替口座：00140-8-536957  
口座名義：パルシック
- 銀行からの寄付 三井住友銀行 神田支店(普) 2384136  
口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、ご住所とお名前をご一報ください。

サポーター・  
寄付ページ  
QRコード

